

## 育児行動の発現機序と育児放棄（ネグレクト）の原因を解明

<sup>1</sup>群馬大学大学院医学系研究科応用生理学, <sup>2</sup>高崎健康福祉大学健康福祉学部栄養生理学  
西連寺拓<sup>1</sup>, 池澤 淳<sup>1</sup> (下川哲昭<sup>1,2</sup>)

厚生労働省は、児童虐待の相談種別対応件数の21.1%が「保護の怠慢・拒否（ネグレクト）」が占めると報告しています(平成28年度社会福祉行政業務報告)。しかし、ネグレクトの原因に関しては「幼児期にネグレクトされた人は、将来親となった際に今度は自分の子供をネグレクトする」といった断片的な知見が先行するもその科学的理解は極めて乏しい現状です。

本研究では、出産数も乳腺の機能も正常だが子育てに興味を示さないネグレクトマウスに対して、受精卵の交換移植やホルモン投与実験等を行い解析しました。その結果、(1) 将来子育てするか？しないか？は、従来から考えられてきた母親の妊娠期や出産後ではなく、母親自身がその母親の子宮内にいた胎児期の神経内分泌環境によってその方向性が決定される。(2) その決定には、胎児期の脳内環境、特に母体の脳下垂体から分泌されるホルモンであるプロラクチンが重要である、

(3) 母体からのプロラクチンによって将来育児行動に必要な脳内育児神経回路が活性化する、などが明らかになりました。

今回の成果は、年々増加するネグレクトに対してその原因と発症メカニズムを理解し、ネグレクトを回避するための基礎的な知見になると期待されます。

Maternal prolactin during late pregnancy is important in generating nurturing behavior in the offspring. Sairenji TJ, Ikezawa J, Kaneko R, Masuda S, Uchida K, Takanashi Y, Masuda H, Sairenji T, Amano I, Takatsuru Y, Sayama K, Haglund K, Dikic I, Koibuchi N, Shimokawa N. Proc Natl Acad Sci USA **114** (49) : 13042-13047, 2017.

利益相反無し

[図は学会ホームページ <http://physiology.jp/>を参照]

生理学および関連諸分野における、会員各位の研究成果について、学会ホームページ「サイエンストピックス」の欄に判りやすい解説を紹介し、広く社会に発信しています。会員の皆様の奮ってのご投稿、ならびに、候補著者のご推薦をお願いいたします。「サイエンストピックス」への投稿は学会事務局にて随時受け付けております。